

1999年度の平城宮と平城京の調査



東院南門前の調査（第301次調査区全景・南西から）
二条条間路北側溝SD5200Bbが築地堀と平行して調査区を横断しており、護岸の石とその抜き取り痕跡がよくわかる。復元された門SB16000Cの前面には敷石と橋脚も検出している。築地堀内側の奥は復元整備された東院庭園、画面左上にみえるのは宇奈多理坐高御魂神社の社柱。
本文4頁参照（撮影／中村一郎）

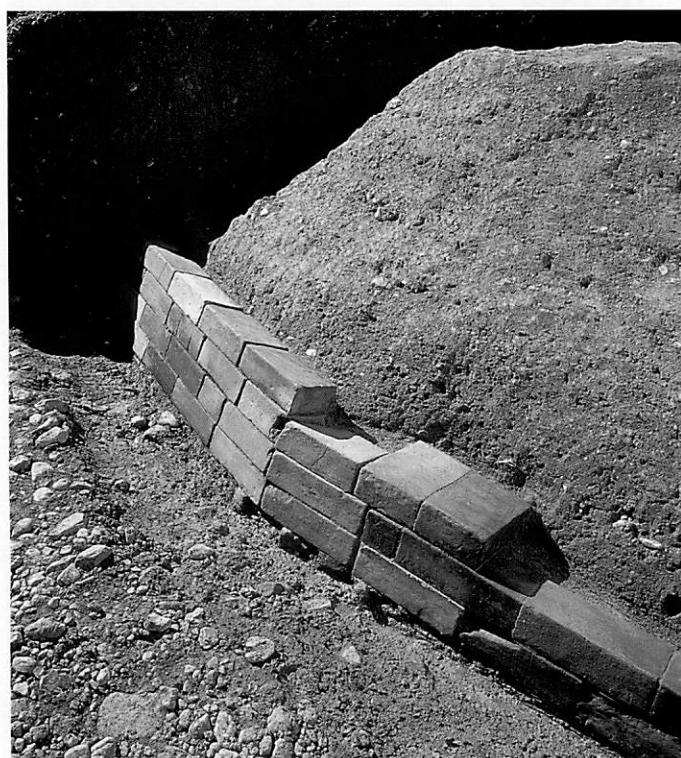


平城宮東院庭園の蛇行溝（第302次調査・南から）
曲水宴に用いたと推定できる細かく蛇行する溝。東院庭園で2例目の発見。東院庭園の中央建物西側を南流し池に注ぐ。底石が良く残り、上手には玉石敷きの小池が2基ある。溝の両側は石敷広場で儀式用空閑地。広場の西は掘立柱塀で目隠している。本文11頁参照（撮影／中村一郎）



第一次大極殿院（第305次調査・北西から）

上の写真は調査区を大極殿側から俯瞰。調査区内遠方が大極殿院の西を限る西面築地回廊。奈良時代前半は、手前からそこまでが埠積壇の上となり、建物は一切ない。柱穴群は奈良時代後半の西宮と、平安時代初頭の平城上皇の宮殿に伴う掘立柱建物遺構。調査区南東部の埠積擁壁を埋めた整地土のラインが斜めに延びる。本文14頁参照（撮影／中村一郎）



埠積擁壁（第305次調査・東から）

出隅部分の様子。コーナーを挟んで埠の積み方に精粗がみられる。背後はすべて盛土で、裏込めの粘土を詰めながら埠を積み上げている。埠前面の角度はコーナーの東側で70度、西側で65度である。本文16頁参照（撮影／中村一郎）



興福寺中金堂院回廊（第308次調査・南東から）

「境内整備構想」にもとづく第2年度の調査で、中金堂院を囲む複廊の北東隅を中心発掘した。調査前から地上に露していた礎石は、ほぼ創建当初から使われてきたことが判明し、一部で平安期の雨落溝もきれいに残る。また、回廊造営以前の平行する2条の東西溝を発見した。

本文32頁参照（撮影／中村一郎）

西隆寺出土遺物（第306・309次調査）

西隆寺の調査では、石製六角小塔の屋蓋と基座、小型海獸葡萄鏡、経軸頭金具などの特殊遺物が出土した。石製六角小塔の基座は、正倉院三彩塔の基座と同形同大であることが注目される。

本文53頁参照（撮影／牛嶋茂）

興福寺中金堂院出土遺物（第308次調査）

緑釉水波文塼（手前）は、半肉彫りで水波文を律動的に表現する。創建時の中金堂の莊嚴を偲ばせる。鼻の高いユーモラスな鬼面文軒丸瓦（中）は他に類例が乏しい。金箔を施した桐文軒丸瓦（奥）は桃山期のもので、大和での出土は初例。本文37頁参照（撮影／牛嶋茂）

法華寺阿弥陀浄土院出土の金銅製垂木先金具

薄い銅板を切り抜いて作ったもので、おもて面のごく一部に鍍金が残る。文様は花文と対葉形、蕨手形を対称的に配置したもので、流麗な構成をみせる。様式年代的には奈良時代前半のものともみられるが、庭園の造営年代にもかかわることであり、なお、検討の必要がある。

本文59頁参照（撮影／中村一郎）

法華寺阿弥陀浄土院の園池SG7700（第312次調査・北から）

従来より存在が想定されてきた園池をはじめて確認し、浄土庭園の先駆けと呼ぶにふさわしい内容を持つことを明らかにした。天平人が思い描いた阿弥陀浄土世界とは、このような姿だったのだろうか。

本文56頁参照（撮影／中村一郎）

大乗院庭園西小池（江戸時代）の護岸

（第310次調査・北から）

大乗院の中心建物群に隣接する西小池は庭園の破棄後埋め立てられ、一部が遺存するのみであった。地形測量や文献、絵画史料等を用いた森蘿氏の復元をはじめ多くの研究成果が蓄積される中、発掘調査による庭園の実態の把握が必要であった。今回の調査で、江戸時代に構築された池の東岸を検出したことにより、池の正確な位置や護岸の方法がわかり庭園の復元に有効な情報を得た。

本文42頁参照（撮影／中村一郎）